

《第485回（2021年10月7日）子どもの本の読書会記録》 参加者：5人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

『ミス・ヒッコリーと森のなかまたち』 キャロライン・シャーウィン・ベイリー/作，坪井 郁美/訳，
ルース・クリスマン・ガネット/画 福音館書店

ミス・ヒッコリーは、頭がヒッコリーの実、胴体がりんごの小枝でできた不思議なお人形です。お屋敷の庭にある、トウモロコシの芯でできた家で暮らしています。ある秋の日、カラスが悪いニュースを知らせに来ます。なんと今年の冬は、お屋敷の人たちがミス・ヒッコリーを置いて、遠くへ引っ越すことになったというのです。お屋敷で冬ごもりする予定だったミス・ヒッコリーはショックを受けます。トウモロコシの芯の家では、厳しい冬の寒さは耐えきれません。困り果てたミス・ヒッコリーに、カラスは新居として、コマドリの巣を紹介しします。突然始まった新生活に、ミス・ヒッコリーは戸惑います。しかし、工夫を凝らし、様々な動物と出会いながら、冬を過ごしていきます。

この作品は、1947年にニューベリー賞を受賞しました。また、挿絵は、「エルマーの冒険」シリーズを手掛けたルース・クリスマン・ガネットです。

次に、読書会に参加された方の感想を紹介します。

- 初めて読んだが、「何でいままで読んでこなかったんだろう」と思った。生き生きとしていて、情景が想像できる。挿絵は白黒だが、まるで色がついているように感じられる。ミス・ヒッコリーが自然の中で工夫しながら生きている姿が魅力的。こんな暮らしをしてみたい。楽しく読めたが、ミス・ヒッコリーが頭を食べられるシーンはとてもショックだった。このシーンは、こどもはどう受け止めるだろうか？
- 最近読んだ本の中で一番面白かった。どう展開していくのか、ドキドキしながら読んだ。1本の線のように、ミス・ヒッコリーの生涯がつづられている。ウシガエルの変身やマーモットが春の訪れを告げたことなど、印象的な場面がいくつもあった。頭が食べられたシーンは、若い時に読んでいたら怖かったかもしれないが、

今は怖く感じない。読みごたえがあった。

●読んだのは2回目だが、やはりミス・ヒッコリーが頭を食べられるシーンの衝撃は大きい。頭が食べられている状況なのに喋ることができるのは、ホラーのような印象を受けた。しかし、1回目に読んだ時より、楽しんで読めた。季節の移り変わりが良く書けていて、テンポがいい。カラスは、ナビゲーターのような役割をしていると思った。主人公が頭を食べられるというのは、アンパンマンに似ている。

●1回目に読んだときは頭を食べられるシーンが衝撃で、苦手意識が芽生えた本。今回もやはり衝撃的だったが、楽しんで読めた。話自体は楽しいが、主人公のミス・ヒッコリーの性格が悪いのは驚きだった。タイトルの「森のなかまたち」とは、私たちが考える仲間ではなく、森全体の大きな意味での仲間ということだろうか。一応明るい感じで終わっているが、それでも衝撃が残る。

●読後、「かわいい物語だった」と思った。自然のものでこまごまと服や日用品を作るシーンが多くあり、ままごとのようで楽しかった。情景が想像できる文章だった。凍ったベリーを「冷凍食品」と表現している訳が面白い。ミス・ヒッコリーの性格の悪さが意外で驚いた。頭が食べられるシーンはショックだが、ラストはきれいな終わり方でよかった。



次回 11月11日（木）10:00～11:30 オーテピア4階集会室

□『はじめてであう すうがくの絵本 1』 安野 光雅/著 福音館書店

申込み・参加費不要